

## 青龍神への巻き

第一関所へ旅に出た愛士隊員四人は第一の関所に到着した。関所の周りにはドクロ人間の姿をした邪悪兵（シャーク）が護りを固めていた。「これより関所に突撃する皆心してかれ」、松龍豪（ヒデ）が発したと同時に何者かが関所に向かって走り出した。「誰だ、あれは」、皆が叫び、見入ると、小さな子供が背に刀を背負い突撃していた。関所からは邪悪兵（シャーク）が飛び出してきた。「あぶない！子供がく」、そう皆が思った瞬間ヒデが邪悪兵（シャーク）の前に飛び出し、小野派一刀流のみごとな剣さばきで、次々と邪悪兵（シャーク）を倒していった。そして、あつという間に邪悪兵（シャーク）をけちらし、その勢いそのまま関所の中へ進んでいった。そこには、邪悪神ビシヤの分身、変異獣（ヘンイジュウ）が待ち構えていた。「こしやくな奴、俺が相手だ」、と言ったその時、子供が背中から大きな刀を抜き変異獣（ヘンイジュウ）めがけて突進していくではないか「お父ちゃんの仇、受けてみよ！」と「ふざけるな小僧、返り討ちにしてくれるわ」、変異獣（ヘンイジュウ）が子供に襲いかかって来たまさにその時、「あぶない！」と皆が声を発すると同時に、後ろから子供の背中を足で踏み台の様に踏み倒し、高く舞い上がり変異獣（ヘンイジュウ）めがけて、「エイ！」と、一突き、ヒデの剣が変異獣（ヘンイジュウ）の中心部に突き刺さった。「ウーウー」という、うめき声と共に、あろうことか変異獣（ヘンイジュウ）の体が溶け始め、あつと言う間に溶けてなくなり邪悪兵（シャーク）も皆消えうせた。小野派一刀流、突きの剣、見事である。松龍豪（ヒデ）は子供に駆け寄り、「大丈夫か？まったく無鉄砲な奴だな、やられちゃう所だったぞ」、と声をかけると、「ちよつと背中が痛いけど大丈夫だよ、でもおいらの背中のおかげで奴をやっつけられたんだろう、おいら役に立ったんだよね」、「生意気言うんじゃないよ、無事だったからいいけど、やられちゃったらどうすんだ」。「さあ危ない目にあうから家に帰りなさい」、と言うと子供は、「おいらのお父ちゃんは邪悪神ビシヤのせいで亡くなったんだ」「邪悪神ビシヤを倒してお父ちゃんの仇をしてお母ちゃんも、じいちゃんも安心して暮らせるにほんまつに戻すためにもおいら役に立ちたいんだ」。「この刀は、お母ちゃんがおいらのためにお金を工面しやつと買えた刀なんだ」、「そして、立派に戦ってお役に立ってこいって泣きながら送り出してくれたお母ちゃんやじいちゃんのために帰らない。おいらも一緒に連れてってくれよ」と、「だめだ、お前はまだ子供だろう」と、ヒデがいうと、「いやだ、おいらは一人でも絶対、絶対行く」。それを見ていた他の三人は、ヒデに、「まあまあ、きつとだめって言っても付いてくるだろう」、「どうしようもないガキだな」、マサが、「わかった、しょうがない俺が面倒みるから、ヒデ許してやんなよ」、「しょうがないな」、鹿虎の雅（マサ）の一言で仲間に加わった子供、その名は久保豊四郎、数え十二歳である。

第二関所Ⅱ久保豊四郎が加わり五人となった愛士隊一行は第二関所へと向かった。

「これが奴らの第二の関所か」、用心深く観察していると、するとそれに気がついた邪悪兵（シャーク）が早速出てきた。「今度はおれの出番だ、みんな見ている」。と言うなり鹿虎の雅（マサ）が突進し強靱な体で大太刀を振り、立ち向かってきた邪悪兵（シャーク）をつぎつぎとなぎ倒していった。そして、ついに関所の中へと進み、変異獣（ヘンイジュウ）までたどり着いた、と思ったら、そこには、なんと美しい女人が立っていたではないか。「おまえは誰だ、変異獣（ヘンイジュウ）はどこだ」。美女は答えた、「そんな人知りませんよ、だいたいここには誰もいないわ。そんなことより、ねえ」と鹿虎の雅（マサ）に言った、「まあなんてお強い方、ステキ、戦いはもういいのよ、それより大太刀を置いて私と一緒に良いところに行きましょう。さあ〜」、と手を差し伸べてきた、美女に言い寄られたマサはデレデレが止まらない、「おまえ何かたくらんでいるんじゃないか？」そう言うマサに、「そんなことないわよ、あなたが強くてカッコイイ、色男だもの、わたしは本気で惚れたのよ。ねえ、早く一緒に行きましょう」。「そうかい、それじゃいいよ」と、手を握ろうとしたその時、「手を握っちゃだめだ」、と大きな声で、久保豊四郎がマサに飛びついた、「目を覚まして、そいつは女人じゃない、変異獣（ヘンイジュウ）だ」と、「こんな美人が変異獣（ヘンイジュウ）なわけないだろう」、マサの言葉に豊四郎は、「目を覚まして」と、おもいきりマサのほほをたたいた。「小僧なにを言っているの、そんなのウソよ、さあ〜私と一緒に行きましょう」。女人がマサに抱きつこうとしたその時、マサは豊四郎を突き放し、女人に抱きつくかと思いきや、ヤーと大太刀を一振り、すると、「ギャー」という悲鳴とともに女人は真二つになった、そして姿は、変異獣（ヘンイジュウ）に戻り、やがて溶けてなくなった。間一髪のところマサは我に返り難を逃れた。「危うく騙される所だったぜ。なんて恐ろしい事よ、女人に化けているとはな」、豊四郎、ありがとうよ、危ないところだったぜ」、マサが礼を言うと、豊四郎は、「まったく女の人にはだらしがないんだから、おいらが付いていないと、だめだねマサは」。「生意気言うんじゃないよまったく」、と言いながら鹿虎の雅（マサ）は豊四郎を抱き寄せ、肩車に。微笑ましいシーンをみながら一行は、「さー次の関所へ出かけるぞ」と笑いながら出発した。

第三関所Ⅱ一行は第三関所に向かいながら、「奴らはいろんなものに変異することができるとみただから気をつけなくちゃなあ」と話しているうちに、関所らしき所に到着、しかしそこには邪悪兵（シャーク）の姿は無く、石の壁が並んでいた。「おかしいな、ここは関所じゃないのか誰もいないぞ、とりあえず中へ入ろうぜ」と、マサが言ったその時、石の壁が動き出した。「なんだあ、石の壁が襲って来たぞ」、「これはいったいどういうことだ」。ここは第三の関所、奴らは石に変異し壁の壁に見せかけ愛士隊を待ち伏せしていたのである。「やばい」、必死で応戦するヒデ、マサ、しかし、石じゃ刀は通用しない、絶体絶命のピンチだ、どうする、すると、「ここは私の出番ね」、そう言

うと石雀晶（アキラ）が袋から取りだした石を奴らに向けると、光が、「トルコ光線おみまいよ」、びくびく、光線が次々と石の壁に当たると。光線を受けた石の壁に変異した邪悪兵（シャーク）は粉々に砕け散り、次々と破壊されていった、一つ、二つ、と見る見るうちに見る影もなくなつた。「やったー、よしいくぞ」、一行が関所の中に入るとそこには大きな岩があつた。「変異獣（ヘンイジュウ）はどこだ」、きつとこの中にいるに違いないわ、アキラは大きな岩に向け、「トルコ光線おみまいよ」、と光線を浴びせる、しかし、びくともしない。「トルコ光線が効かない」、「やばい」、マサが思つた時、「それならこのエメラルドレーザーを受けてみよ」、アキラはブレスレットのエメラルドを大きな岩に向け、レーザーを発射、ジクジク、すると岩が揺れ出し少しずつひびが入りはじめ、「もうすこしよ」、やがて岩はひびが大きくなりくだけた。「やったー」、が中から石の鎧に身を覆つた変異獣（ヘンイジュウ）が現れた、「しぶといはね」、そこにも容赦なくエメラルドレーザーをあびせるアキラ、「こんなもんで俺様を倒せると思うのか」、変異獣（ヘンイジュウ）は攻撃に耐え不敵に笑つた。「これまでだな」、「覚悟しやがれ」、変異獣（ヘンイジュウ）が反撃、アキラに襲いかかつてきた。「あぶない！」皆がそう思つた瞬間、アキラのペンダントから、七色の光線が変異獣（ヘンイジュウ）めがけ照射された、ダイヤモンドビームである。目がくらむほどの威力である。「なんだこれは」、変異獣（ヘンイジュウ）はそれでもアキラに襲いかかろうとするが、アキラは、「ダイヤモンドビーム」と、言いながらビームを浴びせつつけ反撃を許さない、と、変異獣（ヘンイジュウ）に変化が、鎧が溶け出したのだ、そんなばかな、変異獣（ヘンイジュウ）の鎧は溶け、そして自身も溶けだし、ついに邪悪兵（シャーク）諸共溶けてなくなつてしまつた「やったぞ！」「アキラ大丈夫か？」みんながアキラのもとへ、「大丈夫よ、危なかつたわ、それにしても恐ろしい相手だわ」。アキラは気を取り戻し、あたり一面にダイヤモンドビームを照らした。何事が起きるのだろうとみんなが注目していると、あつという間に周り一面はきれいな石に生まれ変わったのです。「すごい！魔法を見ている様だぜ」、マサの言葉に、「当り前でしょ、私は石光の魔術師、石雀晶（アキラ）よ」、「必ず元の平和を取り戻し、綺麗な石でみんなの心を癒してあげるわ」。さすがわれらのマドンナ、石雀晶（アキラ）「さあ、次の関所にさつさと行くわよ！」「おー！」その声に一行は足早にこの地を後にしたのである。

第四関所Ⅱ一行は第四関所に到着した。そこは大きな洞窟だつた。ヒデが言った、「ここはうかつに攻め込めないな」、「洞窟の中に攻め込めばやつらの思うつぼだ。」「よし、ここは俺に任しとけ、いい考えがある。」と、遊玄丈（ジョウ）、持ってきた酒と、取り急ぎ造り出した酒をひょうたんに詰め何個も持つて洞窟の前に進んだ、すると邪悪兵（シャーク）が出てきてあつという間に取り囲まれた、「おいおい待ってくれ、俺は、お前達の見方だ」、「俺は何もしないよ、たまには羽目を外すのも良いんじゃないかと

みんなに酒を持って来てやったんだ」「うるさい、黙れ」「やっちまえ」と邪悪兵（シヤーク）「いやいや待ってくれ、こんなに旨い酒は他にないし元氣が出る、うそだと思つたら一口飲んでみる、あとで後悔しても知らねえよ」「ねえそのカツコイイお兄さん騙されたと思つて一口、いや舐めるだけでも試してみてよ」、すると邪悪兵（シヤーク）の一人が誘いに乗って舐めてみた、「うくんこれは」、そして一口、口にする「これは旨い」そして一気に飲み始めた。その一言、そのようすで皆、「俺にも酒をくれ」と、我先にと洞窟から邪悪兵（シヤーク）が酒を飲みにぞろぞろと出てきた。するとどうだ、戦いを忘れ愉快に踊りだしたではないか、飲めや歌へのドンチャン騒ぎだ。あまりにも騒がしい外の様子を見に、変異獣（ヘンイジュウ）が洞窟から出てきた。なんなのこの騒ぎは、そしてこの有様は、そこへ遊玄丈（ジョウ）が酒を持ってやって来た。「貴方様もおひとついかがですか」、と酒を勧めますが、さすが変異獣（ヘンイジュウ）「オマエは何者」、と言うなり、いきなり襲いかかってきました。「あぶない！」ジョーがやられそうになったその時、ヒデが変異獣（ヘンイジュウ）へ斬りかかりました。「こしゃくな、きさまには俺を倒せない返り討ちにしてくれるわ」と変異獣（ヘンイジュウ）がヒデに襲いかかったその時、体制を立て直したジョーは懐よりゴム風船を取り出し変異獣（ヘンイジュウ）めがけ投げつけました。一つ、二つ、そしてもう一つ、当たった風船は弾け、中から出た液体が変異獣（ヘンイジュウ）の全身に溶びせられました。するとどうでしょう。「なんだこりゃ」と言うことばと同時に体が溶け出し、邪悪兵（シヤーク）諸共あつと言う間に姿が消えてなくなりました。「これは一体どういうことだ」、みんながジョーに駆け寄り説明を求めると、「実は、前もって、変異獣（ヘンイジュウ）を倒す為に効くワクチン酒を造っていたのさ。どこまで効くかは賭けだったけど、おれの理論は間違いなかったってことさ」「ヨッシャー」と、自慢げに話した。さすが愛士隊一の論客、遊玄丈（ジョウ）である、恐れ入ったよ。

第五関所Ⅱ 一行が関所に向かう途中、向こうから見慣れぬ奴がやってくる。背中になにか背負っている。皆用心して、すると、こちらの様子を察したのか、自分から「いやいや皆さん、拙者は怪しいものではござらん、ご安心めされ」と自分は全国を行脚中という背中に如意輪観世菩薩を背負った東光坊正慶（坊主）であると名乗った。「ところで、あなた達はどこへ行かれるのかな」「ま、信用するか」ヒデは言った「実は私たち、邪悪神ビシャを倒すために青龍神に会いに行くところなのです」「それなら拙者も同行させてくれ、この世を何とかせねば、と思案に暮れていた所であったからちようどいい」。危険な旅ですけどよろしいのですか、「わしの背中には如意輪観音様が ついているから大丈夫」「そうですか、それでは一緒しましょう」。そして関所にむかった。目の前に現れたところは何と不気味なところだろう。そこは一面萱がおおいしげり、妖気漂う岩屋が一つ、きつとこの中に変異獣（ヘンイジュウ）が潜み邪悪兵（シヤーク）が護っているに違いない。それにしても、不気味である。「妖気が漂っていま

す、ここは拙者が」、早速東光坊正慶は「南無如意輪觀世菩薩」とお経を唱え始めた。すると邪悪兵（シャーク）達が続々と出てきた、そして襲いかかって来た。東光坊がお経を唱え続けていると、持っていた数珠がだんだん大きくなり回転し始めた。ワーと奇声をあげ襲いかかった邪悪兵（シャーク）はつぎつぎと叩きのめされてゆき、ついに東光坊は岩屋の前まで到達した。すると中から人影が、なんとその人の姿は鬼婆ではないか、出刃庖丁を手に東光坊に激しく襲いかかる、が必至で数珠と、お経で応戦する東光坊、「大丈夫か」、ヒデが鬼婆の前に立ち向かう、が、「助太刀無用でござる、俺には如意輪觀音さまがついているぜ」、「南無如意輪觀世菩薩、南無如意輪觀世菩薩、南無如意輪觀世菩薩」、東光坊正慶は繰り返してお経を唱える、すると東光坊の背中に背負っていた如意輪觀世菩薩が突如光り出した。「あれはなんだ。なにが起こっている」。そう思った瞬間暗雲がたれこみ激しい爆音と共に稲妻が走り鬼婆めがけて突き刺さった。あく、鬼婆は光煌き変異獣（ヘンイジュウ）に姿を戻した。そして変異獣（ヘンイジュウ）も邪悪兵（シャーク）も一瞬にして消え去った。あたりは元の明るさに戻り、みんなは平静を取り戻した。老婆に変異獣（ヘンイジュウ）がのり移っていたのだ。「鬼婆とはいや恐ろしい者を見た」、「いつ私たちも鬼に心を奪われるかもしれない、みんな心して進みましよう」、「合いわかった。南無如意輪觀世菩薩、南無如意輪觀世菩薩」。東光坊正慶が加わり六名となった愛士隊いざ次なる関所へ。

第六関所Ⅱ六番目の関所を目指して急ぐ一行の目の前に、もがき苦しんでいる多くの老人子供達が、そしてそれを必死に看病している医士らしき人に出会う。「どうしたのですか？」アキラが尋ねると、「みんなウイルス菌に侵され感染しているのですよ」「邪悪兵（シャーク）の奴らがウイルス菌をばらまいているのです」。「あなたはウイルス菌が怖くないのですか」、アキラがまた尋ねると、「もちろん怖いですが、でも苦しんでいる人達を黙って見ている訳にはいかない、一人でも多くの人を助ける、それが私の天命です」。「あなた達は」「私たちはその邪悪兵（シャーク）の元締め邪悪神ビシャを倒すために青龍神に会いに行くところですよ」。「ああそうでしたか、お気をつけていってください」。そこで別れた一行が関所に到着すると、邪悪兵（シャーク）がいきなり襲ってきた。しかし、ヒデ、マサ、らの活躍で、あつという間に邪悪兵（シャーク）をけ散らし関所の中へ、そして変異獣（ヘンイジュウ）の所までたどり着いた、そこにいたのは鉄の鎧を身にまとった変異獣（ヘンイジュウ）だった。「待っていたぞ、おまえらもこれまでだ、覚悟しろ」と、しかし「えい！」とヒデが斬りつけた、が、刀がはじき返された、マサも太刀を振うが、これもまたはじきかえされた。これは厄介だ、刀が通用しない。アキラの光線も、ジョーのワクチン酒も鉄の鎧の前にみな弾き返され打つ手なしであった「どうした、おまえらの攻撃はもう終わりか？」「お次はこっちの番だ、覚悟しろ」と、襲いかかって来た、これはヤバイそう思ったそのとき、どこからからか、白羽の矢が飛んできて変異獣（ヘンイジュウ）の鉄の鎧に、グサッと刺

さった。やった、と思ったが、変異獣（ヘンイジュウ）は、立ったまま、「俺はこの通りなんでもないぞ」と、ヒデやマサに襲いかかったその時、刺さった矢がグリグリと回転しながら変異獣（ヘンイジュウ）の体を突き進み貫通させたではないか。「そんなバカな」と言いながら体は溶けてなくなってしまう。邪悪兵（シャーク）も消えてなくなったのは言うまでもない。「いったいだれが」、そう思いみんなが振り返ると、そこにはさっきの医士らしき男が立っていた。彼の名は三浦権太郎、医学の心得がある武士で弓の名手である。「なぜあなたが」、権太郎は言った、「私の前に突然神様が現れ、どんなものでも突き破る事のできる破魔矢を賜わり、これでみんなを守るために変異獣（ヘンイジュウ）を撃つのだと導かれ、撃つたのです」と。「ありがとう、神様はまだ俺達を見捨てないでいてくれるのだ」とヒデが言うと。三浦権太郎は、「もう一つお告げがありました」、「それはお前も愛士隊に加わり青龍神に会う旅に行きなさい、それが多くの人々を助ける事につながるし、それがおまえの運命だ」と。「神様がっているのだからこんな心強い事はない。ご一緒しましょう」、「ヒデが言うと、「よしや！決まりだ、また仲間が増えたね」、嬉しそうに豊四郎が飛びはね、ここに七番目の愛士隊員の誕生である。さあ、いそぐぞ、青龍神のもとへ。

第七関所Ⅱ一行の目の前には海が広がり、豊四郎は、おーはしゃぎ。「わあゝ海だ、海だ」、楽しんでいるのも束の間、前方に見える岬に関所があった。海風が強く、岬に近づくのもやつとだと言うのに、風が避けているかの如く少女が歩いてきた。「ねえどうして君は風にあおられないの」、マサが少女に問いかけた。すると、「私は風使いの申し子赤羽の風雅だよ」、「風は友達、自由に操り、大風だって乗りこなせるんだから」。少女は自慢げに言った。「そうか、では一つ頼みがある、岬にある変異獣（ヘンイジュウ）の関所まで行って奴等をやっつけたんだけど、この海風何とかならない？」風雅は少しの間考えて「うーん、わかった、あたいが大風に乗って奴等をやっつけてやるよ」。「そんな無茶はしないで」とマサが言う間もなく赤羽風雅は大風に乗って大空へと舞い上がって行った。「大丈夫なのかな？」みんな心配そうに見上げていると、大風は関所に近づいた。そして、関所を護っている邪悪兵（シャーク）は大風を撃ち落とそうと外に出てきたところ、大風に乗った風雅が風に乗って邪悪兵（シャーク）のそばを飛び、次々に海へ吹き飛ばしていった。見事な腕前である。その間に愛士隊の一行が関所に到着、変異獣（ヘンイジュウ）を探したがその姿は見当たらない。「何処にいるんだ」、「風雅、空からよく探してくれ」、マサが風雅に声をかけた。「あいよ」、風雅があたりをよく見渡していると、舟に乗り逃げ出している変異獣（ヘンイジュウ）を発見、海だ。身の危険を察したのだろう海へ逃げ出したのである。「よし、風雅、これを取りに来てくれないか、これをやつにあてるんだ」、遊玄丈（ジョウ）がワクチン酒の入ったゴム風船を風雅に投げ渡した。それを受け取った風雅は大風に乗って、変異獣（ヘンイジュウ）を追いかけた。さすがにここまで追ってこられないだろう、と、舟を走

らせていた変異獣（ヘンイジュウ）だが、あつと気がつくつと、いつの間にか風雅が真上へ、そして風雅は変異獣（ヘンイジュウ）めがけてワクチン酒の入ったゴム風船を投げつけた。「えい！」すると見事命中、たまらず変異獣（ヘンイジュウ）は海へ落ち、そして溶けだし、奴らの姿は皆消え去った。みんなのもとに戻って来た風雅に、「見事だ、ありがとう」と、ヒデが言うと、風雅は、「私の力じゃないよ、ジョーのワクチン酒ゴム風船のおかげだよ」と、「なんだ、なんだあー、俺の出番がなかったじゃないか」とマサはちよつと悔しがりました。豊四郎は、「やったくおねえちゃん、すごいや、おいら達と一緒に奴らをやっつけに行こうよ」。ヒデが旅の事情を説明すると風雅は「あいよ、分かった、あたいでよければ、仲間に入れておくれ」。また一人、愛士隊の仲間が増え、その数八人に。

第八関所Ⅱ一行は小高い山のふもとにやってきた、「どうやらあの山の上が関所だな」、「攻めのぼるのも急な勾配で難儀だぜ」、「そのうえ奴らからまる見え、登っている所を狙われたら奴らの餌食になってしまう」「風雅も狙い撃ちに合っちゃうな、何かいい方法は無いものか」と、皆が話していたその時、「あたい、いい人知っているから、連れてくるね」、風雅がそう言うで大風に乗り飛び出して行った。「鉄砲玉みたいだな、風雅は」、皆がそう思った。そして、風雅と一緒に大風に乗って一人の男が現れた。その男の名は、黒鐘鉄蔵、爆弾製造請負花火師である。「爆弾であの山にいる邪悪兵（シャグ）を吹き飛ばしてほしいのだけれど出来るかい」、風雅が黒鐘鉄蔵に尋ねると、「まかせな、おやすいごようだ。」「じゃちよつと手伝つてくれ」、そう言うマサ達に手伝ってもらいなにやら持ってきた。「これはおおつ（大砲）だ」、「おれが造った尺玉の爆弾が飛ばせるんだぜ」。「爆弾の威力は直径三百mの範囲に及ぶんだ、よく見てるよ」、「ドドドーン」という大きな音と同時に発射、爆弾が山頂に命中、そしてもう一発、続けてもう一発、と数回撃ちこんだ。すると、ドドーンという音と共に山は崩れ邪悪兵（シャグ）は爆弾の威力になすすべもなく壊滅状態に、そしてついに姿を現した変異獣（ヘンイジュウ）へも一発撃ち込んだ。ドドドーン、と、命中！「やったあー」、誰もが喜んだ、だがあるうことか、変異獣（ヘンイジュウ）の体がバラバラに飛び散ったのにそのまま生きているではないか、そして飛び散った破片が徐々にヘンカブの姿に戻ろうと動きだしている。まずいぞ、誰もがそう思った時、「もう一丁今度は打ち上げだ」、そう言うなり三尺玉の悪霊退散の花火を、東光坊や三浦権太郎の悪霊退散の祈念とともに、次々と十発打ち上げた、直径五百五十mの範囲に悪霊退散と念じた火の子が降り注ぎ、バラバラに飛び散っていた変異獣（ヘンイジュウ）は全て、邪悪兵（シャグ）ももちろんの事、溶けてしまいました。見事だ、みんなが見とれていると、「よし悪霊退治の祝いにもう一丁あげるか」、黒鐘鉄蔵はそう言うと、花火を次々に打ち上げた。三重芯菊、四重芯菊、八重芯菊、スターマイン、尺玉、と夕闇の空に、見事な大輪の花が咲き乱れた。一時ではあるが、平和な時間を味わった一行、そして、ここ

に九番目の隊士の誕生である。

第九関所Ⅱ一行が向かった先には美しい花園があった。そこでは妖精のように美しい女性が蝶と戯れていた。「皆さんどこへ行かれるのかしら」、美しい女性は一行に問いかけた。間髪入れずにマサが、「あのーこの辺に悪い奴らの関所があるはずなのです、俺達はそいつらをやつつけるためにきたのです。」「ところであなたは何を」、と発したとき花園の虫たちが一斉に飛び出し、逃げ出した。何だ、何だ、何事だろうと思っている。と、地響きが鳴り地面が揺れ出した。「何事だ、これはいったい」、すると花園一帯の地面が急に盛り上がりだし、邪悪兵（シャーク）が土の中から続々と現れた。奴らだ、その時、女性が、「おまちなさい、ここは私の花園お前達の勝手は許しませんよ」、「なにを言っている皆やつちまえ」と、邪悪兵（シャーク）が襲いかかって来た。すると女性は呪文を唱えた「ユリス、ヤ、ユリス、ドウンガン、カサクヤン、インドウムウ」、すると何処からともなく青い蝶ユリスが大量に集まり、邪悪兵（シャーク）の周りに渦を巻くように取り囲んだ。「ウワー、何だこれは」と、もがき苦しんでいる内に、見る見ると邪悪兵（シャーク）の姿が消えていった。そして、最後に姿を現した変異獣（ヘンイジュウ）へも、同じように青い蝶ユリスが何重にも取り囲み、渦を巻くように周り始めた、「えーい」と、ユリスに襲いかかり格闘する変異獣（ヘンイジュウ）、固唾をのんで見ていると、変異獣（ヘンイジュウ）も何もできないまま姿を消していった。そして盛り上がった地面が見えないほど、あたり一帯が蝶で埋め尽くされていく、まさにその光景は圧巻である。やがてユリスが渦を解き、どことなくいなくなり始めた。どうなった、とみんなが目を見張ったその先には掘り返された地面は、もとの花園にもどり、虫たちも、何事もなかった様にとびかっている。おおなんと美しい光景だろう。「失礼ですがあなたはいったい何者ですか」、ヒデがそう尋ねると、「私は蝶の妖精Ⅱ大瑠璃あげ葉、この花園を守っているものよ」、「虫達の知らせで、あなた達が来るのを待っていたのです。」「平和な大地に生命あるもの、なにもにも侵されてはなりません。平和な大地を守るため、わたしも戦います。ぜひみなさんの仲間に入れて下さい」。大瑠璃あげ葉の言葉に、ヒデは「こちらこそ喜んで」、と、みんな大歓迎だ、これで愛士隊員が十名に、念願かない青龍神に会える条件がそろった「さあ先をいそぎましょう。」「おー！」愛士隊の隊員達の声にもいっそう力が入った。

第十関所Ⅱ愛士隊の士気は上がり足早に進んでいた。「さあー青龍神のところまではもうすぐだ」。一行が向かった先には岩肌の険しい霊山があらわれた。「すごい所だな、ここに青龍神が居るのか。」「先を進もう」、霊山の麓に辿り着いてさらに進もうとした時、「何なんだこれは、何かがあつて前に進めない」。すると、ジョーが、「これはバリアだ、霊山一帯がバリアに覆われているんだ」、「これじゃバリアを何とかしないと前へ



進めないぞ」。奴等が居るかもしれないとジョーが、ワクチン酒を周りにばら撒いた、そして権太郎は弓を、アキラは光線を、それらは全てはね返された。風雅は空から偵察し、中に入ろうとした、しかしバリアはびくともせず奴等の姿はどこにもなかった。「くそーどうすればこのバリアを破る事が出来るんだ、ジョー何か良い方法は無いのか」、皆、途方に暮れていた。するとヒデが沈黙をやぶり皆に、「ここに集まってくれ、そして手を出して」、十人は円陣を組み、手を中央にお互いの手が重なりあう様に置いた。ヒデが言う「、我ら愛士隊、邪心を捨て、邪悪な心に染まらぬ勇氣、そして愛する家族の為、命ある全ての物の為、地域の為、にほんまつの為、神命に誓い身も心も捧げる一念である、みんな一緒に念じてくれ」、十人は一心不乱に念じ続けた。すると、あたりは暗闇に包まれ稲妻が走り雷鳴が轟き雨風が襲いかかって来た。「う、わあく、」おもわず豊四郎が声を出す「大丈夫みんな付いている集中して念じるんだ」、ヒデが言う。やがて十人の心は一つに、今にも飛ばされそうな勢いで襲いかかってくる雷鳴と風雨、しかしそれをも上回る集中力は神かかっていた。どのくらいの時間が過ぎただろうか、気がつくあたりは、いつの間にか明るく日差しがさしこみ陽気に、そして青い蝶ユリスが大量に愛士隊の周りを渦巻きのようにまわり飛び、三回周った時、こんな事があるうか、バリアは無くなり、眩しい光と雷鳴と共に霊山から青龍神が現れた。邪悪神ビシャによりバリアで閉じ込められていた封印がとけたのである。「よくぞここまで苦難に立ち向かいただり着いた。お前達の心は良くわかった。人の為、命あるもの全ての為にこれを使いなさい」。そう言うとき青龍神は御神刀を一振差し出した。ヒデは拝む様に受け取り、「ありがとうございます。この御神刀は神命のみ使わしていただきます。そして、平和が訪れみんなが安心して暮らせる世になった時、必ずや、この御神刀をお返しに参ります」と、青龍神は、「わかった、その時が来るのを楽しみに待っているぞ」。そう言うとき青龍神は雷鳴と共に天へと昇って行った。皆、満面の笑顔で「やったぞー!」「どんなもんだい」、お互い喜びを分かち合った。しかし、邪悪神ビシャを倒す戦いは、まだ始まったばかり、喜んでばかりはいられない。御神刀を授かった愛士隊の一行は、ひとまず平和を取り戻した青龍の元を離れ次なる地へと旅立つのである。松龍豪（ヒデ）、鹿虎の雅（マサ）、石雀晶（アキラ）、遊玄丈（ジョー）、東光坊正慶、三浦権太郎、赤羽風雅、黒鐘鉄蔵、大瑠璃あげ葉、「みんな一緒に白虎神に会いに出陣だ」、大きな声で先頭を歩くのは久保豊四郎十二歳、愛士隊のアイドルだ。